昭和45年7月25日第3種郵便物認可　平成25年4月1日発行（毎月1回1日発行）　第43巻第11

未来へはばたく地方議会

議員研修誌

地方議会人

The Japanese Local Assemblymen

4

2013 April

共同編集：全国市議会議長会・全国町村議会議長会

特集◆安全な地域づくりをめざす

巻頭言　橋本五郎

●地域防災力の向上をめざす／室崎益輝

●災害に強いまちづくり／目黒公郎

●防災の概念をぶっ潰せ「生活防災」／大西賞典

●災害心理学から見た陥りやすい危険な罠／広瀬弘忠

●役に立つ地域防災計画／井野盛夫

◇現地報告◇

●茨城県取手市

●愛知県知立市

◆議会人のための議会運営12か月（1）

◆短期講座・特別連載（3）第三セクター等の抜本的改革と地方議会の役割

◆市町村議会広報クリニック

◎資料

平成24年度町村議会特別表彰

議会の事績（前篇）

chuoubunkasha

防災の概念をぶっ潰せ「生活防災」

大西賞典（おおにし しょうすけ）
加古川グリーンシティ防災会長
総務省消防庁防災伝道師
防災アドバイザー

防災とは？

あなたは「防災」をひと言で説明することができますか？

防災とは、ひとそれぞれ想いや考え方が違うものです。しかし、防災を伝えていくためには、ひと言で説明する必要を迫られることがあります。そこで、私たちは今このように伝えています。「防災」とは「自分の大切な人を守ること」。そう考えれば、自分が死んではダメな意味が理解できるでしょう。災害で死なない、災害から生き抜くこと。それは自分の大切な人を守り続けるためなのだと気付くはずです。そのモチベーションを維持継続させるためには、自分の大切な人を守るための防災文化を構築することが重要だと考えました。そのために必要なことは、「自助努力と近助努力」が大切だと気付きました。

一般的に防災とは、被害をできるだけ出さないこと、被害をできるだけ小さくするということ、効果的な災害対応を行って被害の拡大を抑え、早く社会を安定させる等の意味があります。しかし、一般人の私達にとって、防災活動とは、何をどのようにすれば良いのでしょうか？どうしても多くの人は、通報・初期消火・避難誘導という消防活動を防災の活動と混同しがちです。

生活防災をやろう

私たちは「防災活動」を特別時の活動にしてしまうのではなく、日常の生活の利便性と災害時の危険回避の両方で恩恵を得られるような活動にすることができないかを考えました。そのひとつの答えとして「災害対策のためだけに活動するのではない」というところに行き着いたのです。それが「生活防災」というものです。この「生活防災」は、京都大学防災研究所の矢守克也教授が生み出された言葉で、教授は生活防災を研究し「生活防災のすすめ」も数多く執筆されており、私達が現在行っている活動の多くも「生活防災のすすめ」から学びました。

生活防災の基本は、自分ができることから、関心のあることからはじめることだと矢守教授は仰っています。どういうことかというと、防災を自分の生活習慣から引き離さないように位置付け、他から独立させたような特別な活動にしないことだということです。言い換えれば、普段の生活の中に防災を組み込むことを考えるということです。個々が持つ生活サイクルの中にある仕事・家事・勉強・趣味等の中に組み込むことです。災害と言うものはどうしても、何時襲ってくるか、襲ってこないのか判らない非日常的な出来事なので、多くの人は防災対策に真剣に取り組

めていないのが現状です。

典型的なものが、災害がどこかで発生すれば、あわてて地震保険に加入したり、非常食を買ったり、懐中電灯を買う等の一時的な備えをする人が多いのも事実です。ですから防災を普段から自分の生活の延長線上に置き、日常的なものにしてしまうことが大切だと考えたのです。普段の生活の利便さに組み込み置き換えることで、非日常的な災害時や緊急時だけと考えない活動にするということです。そうすることで、防災を「意識しない・意識させない」で、自然に防災と共存ができるようにさせるのです。そのためには、チームを作り、みんなで一緒にやるということが大切です。みんなでやれば、すごく楽しいし、他の人と話すことで、自然と自分の知識や技術もスキルアップします。

その結果、自分を守り、自分の大切な人を守ることに繋がっていくのです。このように考えると、地域でのお祭りやイベント等は、素晴らしい防災訓練といえるでしょう。また、単発的に行うのではなく、繰り返し行うことが重要です。習慣的な自分の生活サイクルの中で行うことにより、自分だけではなく、地域の生活文化になっていきます。それが習慣化されると、自然に考え、動けるようになり、そして、楽しみになっていくのです。

具体的な生活防災

自分の生活に定着させる方法としていろいろなものがあります。少しだけ例をあげてみます。

まずは、住居内の整理・整頓です。それができれば、日常での生活が快適に過ごせ、地震の時には、落下物の防止や避難路確保ができています。家庭内のコミュニケーションも重要です。なんといっても、家族内での「あいさつ」は防災上の必需品です。普段からあいさつや会話があれば、家族の行き先や居場所の確認ができ、災害時には安否確認をする上で負担軽減にもなります。散歩や買い物等では、地域を知ることができ、健康増進につながります。その効果として、日常的に危険箇所の把握や、緊急時の利用資源（自販機の場所・コンビニ等）の確認ができています。お風呂の水を流さずにおくと普段では洗濯水の確保になり、災害時にはトイレの水確保にもなります。結果として水道代が安くなる効果も得られます。

地域内のコミュニケーションも非常に重要です。ご近所の方とのあいさつは、地域コミュニティの強化や防犯力の向上になり、更には、地域の人が自分のバックアップ的存在になります。何より、「あいさつ」があると楽しいまちができあがり、毎日がワクワクします。その習慣は、災害時に共助の基盤となり、初動体制の構築が日頃から自然とできあがっていくことになります。発災時の混乱の中で一分一秒をあらそう時に、どこの誰かもわからず「どちら様でした？」ということにならず、即座に助け合う行動がとれます。

また、知恵を出し合って企画するお祭やイベント等は、長期的な地域の生活文化の形成となり、みんなでやることが楽しいという地域文化が根付いていきます。迷惑駐車対策では、あなたの車があなたの大切な人の命を危険にさらすことになっていることも理解して頂くことで迷惑駐車が減り、それによって緊急車両の進入路確保になり、災害時は道路閉塞防止や避難路の確保にもなります。ゴミ出しでは、ゴミの減量、資源の再利用、環境保全になり、災害時は廃棄物処理等の分別作業の軽減に役立ちます。このように生活防災をする上で大切なことは、それぞれを理解する・理解させることが重要なポイントとなるのです。

生活防災の基本

生活防災の基本は、自分の「できること」「関心のあること」から始めることが、とても重要です。平常時の「利便性」と、災害時の「危険回避」の両方で恩恵を得ることができる「防災活動」を推奨しています。そのひ

とつとして「町内チャンピオンマップ（2012年より「ちからこ部」に改名）」という取り組みを考えました。

「ちからこ部」とは、防災意識の向上と、緊急時や災害発生時に、何をするべきか、何を応援してもらうのか、緊急ボランティアをどのように呼びかけるのか等、地域の知恵袋（いろいろな職種、免許、技術）集団として募集したものです。災害時に自分が提供可能な能力やサービスを事前に登録するシステムのことで、個人においては、登録することにより自分自身の防災力の向上とスキルアップ、登録者の家庭における防災減災力アップに繋がると考えました。

登録内容は、医療や看護の技術、ライフライン関係の技術者・知識者、その他各種技術者、建設重機の運転といった防災に直結することだけではなく、パソコンが得意で情報収集や発信ができる、ゴミの分別が得意、買い物が大好き、子守りが得意等があり、災害時の後方支援等に関する登録も推奨しています。また、子どもたちも守られる側ではなく、「自分のできること」を自分で見つけて登録することも大切だと考えました。そして、過去の教訓から、高齢者も災害要援護者としてではなく、培った豊富な経験・知識を活かし、「自分のできることは自分でする意識」を持つことが大切だと考えています。

そうすることで、被災後の高齢者に多く発生する疾患等に負けないための方法や、自分の命を守るためにはどう行動するのが一番良いか、自然と身につくようになるのです。ここで重要なことは、普段本人がやっていることを登録するという点です。ドライバーは運転、幼い子どもをもつ保護者は子どもの世話、パソコンが趣味の人はインターネット操作というように、普段の得意技を活かすだけのことです。もっとも「〜だけのこと」とは、「そんなことでもいいのなら、自分にも防災はできる」と思ってもらうことが大切なのです。「自分でも役に立つなら何でも手伝います」といった登録も、災害発生の緊急時には安心アイテムのひとつなのです。地域のみんなで地域を守ること、これが自分の身は自分で守り、自分の大切な人を守ることに繋がります。

また、「ちからこ部」と同時に「ひと声かけて登録（2012年より「あったかード」に改名）」も行いました。登録することにより、いち早く不安に思う人たちに「声かけ」ができるようにするもので、自分から手を挙げて登録をすることが重要です。「誰かがいつか助けに来てくれるだろう」ではなく、「助けてほしい、不安だ」と自分から発信しなければ、救いの手はいつまで経っても届かないものです。自分から一歩踏み出すためにも「ちからこ部」や「あったかード」登録等の手あげ方式を我々は推奨しています。

防災と楽しくつきあうためには

防災を普段の生活から引きはなしてしまうと、人が集まらないし長続きもしません。また、災害のためだけに保存食品を買ってしまうと、いつの間にか気がついた頃には「消費期限切れ」ということになりかねません。保存食は、非常用の食品というよりも、普段から自分が好んで食べるもの（腐りやすい食品は不可）を少しだけ余分に買うだけで良いのです。そして先に買ったものから食べる。食べたら補充しておく。防災を日常生活の延長線上に位置づけるスタイルで、生活の中に組み入れることができれば、長続きもするし、災害に不意打ちされる心配も減ります。

例えば、晩酌用に自分の好きな缶詰を買い置きする。好きなものだから食べたくなる。食べてしまえば、買い足し、少し余分に買う。自分の好きなものだから買い忘れはしないし、消費期限切れになってしまうこともないので無駄もなくなります。また、非常用の保存食品のように価格も高くなく、特価品の缶詰でも十分美味しく、買い物自体が「次はどれを買おうかなぁ」なんて考えるだけでも、ワクワクする楽しい防災活動になってき

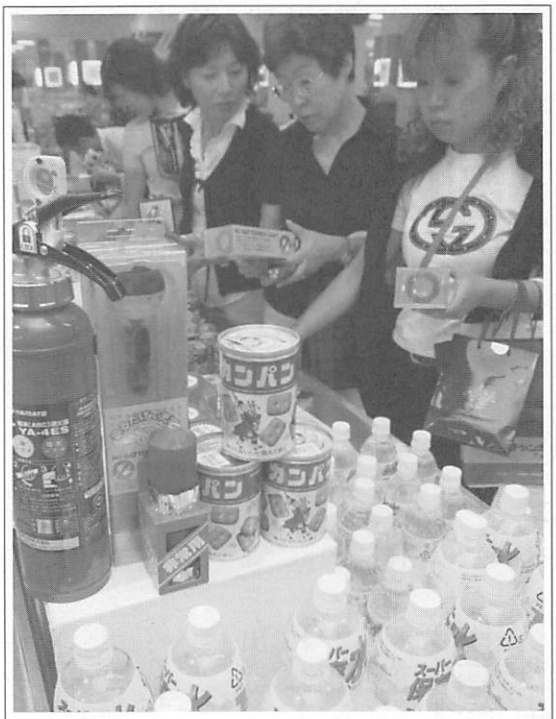
ます。そうなると、家族全員で好きなものを購入することがすごく楽しくなり、備えることが、家族の楽しみにもなっていくのです。「楽しさ」をキーワードにすること。これも生活防災の醍醐味のひとつなのです。

理解を怠る防災対策の落とし穴

「防災対策をしていますか？」と聞かれて、対策をしていると答えた人の多くは「非常持ち出し袋を用意している」「水や食料を用意している」「ラジオや懐中電灯を用意している」「地震保険に加入している」「災害時の連絡方法を家族で決めている」と答える人が多い。しかし、これらは災害が発生した後の活動に対しての準備であり、「防災＝被害を防ぐ」という図式には当てはまらないのです。

一般の人々が個人でできる防災の備えにはいろいろなものがあります。しかし、なぜ備えが必要か理解していない人が多いようです。住宅用火災警報器の義務化で火災警報器を設置し、火災が発生すれば直ちに出火を知ることができます。でも初期消火のための消火器を用意していない人が非常に多いのが現状です。消火器や消火用具、消火方法のノウハウが無ければ、いくら法律で安全対策をしたとしてもあまり意味のないことになってしまうのです。

家屋の耐震化も同じことがいえます。新たな耐震器具を取り付けて、家のバージョンアップを図ることも大切です。しかし家屋も定期的にメンテナンスを行うことも必要です。



地震の続発を受け、売れ行きが急激に伸びている防災グッズ　（写真：共同通信社）

「壊れてから修理する事後保全」ではなく、修繕のサイクルや長期的に計画を立てて修理し家屋の体力を保持することや、畳を上げて床下の掃除や天井裏の掃除等、普段見えない場所を年に一度は目を通すこと等「壊れる前にメンテナンスする予防保全」も大切な耐震措置の一環ではないでしょうか。

ここでよく考えてみましょう。本当にあなたやあなたの家族にとって何が一番重要な防災対策なのでしょうか？決して皆さんの準備している防災対策を否定するのではありません。防災・減災対策は、すべてを関連づけて想定することが大切だということなのです。もちろん水や食料を大量に準備することも大切なのかもしれません。でも、いくらペットボトルの水を段ボール箱で箱買いして大量に用意していても、地震の揺れで段ボールが倒れ、下敷きになり死んでしまったのでは何の意味もないということです。備えるためには、すべて関連づけられた想定のもとで、結末は「死なない・死なせない」で締めくくらなければならないのです。どうもその締めくくりが定義されていないために「防災対策」が曖昧な活動となっているようです。

阪神・淡路大震災では、亡くなった方のほとんどは建物の倒壊・家具の転倒・脱出不可で火災から逃げ出せませんでした。実際には建物さえ倒壊しなければ、延焼火災の発生数は大幅に減少すると言われています。倒壊しなければ、出火しても初期消火がしやすいということです。火は小さいうちなら初期消火で簡単に消すことができます。しかし、倒壊した建物から出火すると我々素人が消火器等を使用しての消火は、ほぼ不可能になります。

阪神・淡路大震災の時は、消火器で消せる

タイミングといわれる「初期消火」を担当するはずのその家人が家屋の倒壊で下敷きになったことで、近隣の人々が消火活動をすることよりも、下敷きとなった人の救出を優先せざるを得なかったという事実があるのです。また倒壊家屋に阻まれて、市民も消防隊も現場に近づくことが容易ではなかったこと等も被害を拡大させたともいえるのです。そう考えれば、耐震化や防火対策の必要性、予防保全の重要性が理解できるのです。

東日本大震災ではどうでしょう。大地震が発生すれば大津波が来ると判っていたはずなのに、多くの人が津波で命を落としてしまいました。地震が発生しても、毎度のことで『たいした津波が来ないだろう』と間違った思い込みで避難をしなかった人が、避難を試みたが間に合わなかったということです。また、防災無線等で津波が襲ってくることを知り、車で避難を始めた人が交通渋滞に巻き込まれ、津波に襲われ亡くなってしまった。しかし、津波は来るものと信じて、高台に避難して命が救われた人が多いのも事実なのです。助かった人たちは「大地震＝大津波」だから「大地震＝逃げる」となり、なぜ逃げなければならないかを理解していたのでしょう。

それは、日々の生活の中に「防災アンテナ」を張る生活をするということなのです。

結論として防災対策の優先順位は、「死なない対策を最優先に考え実行すること」です。災害に襲われた瞬間に「生き残る対策」が必要であり、それこそが防災減災の基本なのです。まずは家を壊さない、家具を倒さない、出火させない等です。もし不幸にも壊れ、倒れ、出火しても「死なない」ことが最も重要なのです。死んでしまえば、準備していた食料や水も全く無意味になってしまうのです。

勘違い防災

災害時要援護者対策でも多くの地域では、生き残れたことを大前提に活動されている「勘違い防災」が非常に多いのが現状です。やるべき対策は、みんながお互いに災害発生の瞬間に「死なない・死なせない対策」を考え活動することです。でも、自分はスーパーマンであり、絶対に災害から生き残れると大きな勘違いして活動してしまっている場合が多く見受けられます。お互いに死なない対策をせずに活動すると、共倒れとなることを東日本大震災の教訓から学ばなければならないのです。しかしながら、自分は次の災害から生き残れることを大前提に考えているのが今の日本の防災の現状です。

私達は、今こそ声高に唱えます「死なない対策」これが最優先の防災活動だと。そして、今こそ、防災の概念をぶっ潰した防災活動が必要な時が来たといえるのです。

皆様も「あなたに本当に必要な防災活動」について一度考え直してみませんか？

◇　◇　◇

詳しくは加古川グリーンシティ防災会ホームページをご覧ください。

URL：http://www.greencity.gr.jp/greencity_bousaikai

本誌の内容刷新に読者の声、地域の情報等を募集しています。

◎ご意見、ご要望、地域の最新情報、ふるさと自慢、まちづくりのアイデア等、幅広い分野でのご投稿をお寄せください。

◎字数は500字から2000字以内とし、文中写真を必要とするものは添付してください。

◎投稿は、本誌編集委員会において検討し、適時掲載いたします。

——◇　◇　◇——

投稿先

〒102-0082

東京都千代田区一番町25番地

全国町村議員会館３階

株式会社　中央文化社

編　集　部